



赤い花



20240526



エリー



目次

1、透明な花	1
2、少年レモン	3
3、少女ベリー	5
4、赤い花	7
5、愛の力	9

1、透明な花

美しい森の奥深くに、キラキラと輝く湖がありました。崖に囲まれた湖の真ん中には島があります。とても美しい透明な花が咲いていました。大人の背丈ほどあるまっすぐな茎の上に、幾重にも重なった大輪の花びらをつけています。

近くの村人たちは、船に乗って島に渡り、透明な花をお祀りしていました。

村人からちやほやされて、有頂天になった花は、もっと褒められたいと願うようになりました。そして、刺を持つようになります。

ある日、花に恋する少年が、刺に触りました。血を吸い上げた花はみるみる赤く染まります。少年は死にました。

花は妖しい魅力を湛えて、恋した人を殺し続けます。

事態に気づいた村人が、船を引き上げ、噂を流し、誰も近づかないようにしました。数百年、血を吸うことができない赤い花は、今にも枯れそうです。

(なぜ誰もいなくなった)

(わたしを崇めよ)

(血を捧げてひとつになれ)

(わたしの元へ来い！)

赤い花は、声にならない叫び声を上げました。

一晩中待ち続け、もう無理かとあきらめかけたその時、湖を囲む崖の上に少年が現れます。

少年は毎日現れます。崖を降りて、湖を渡り、自分に抱きつくことを願います。

最後の力を振り絞って、魅力を振りまき、恋するように仕向けます。

少年はだんだん崖の上にいる時間が長くなっていきました。

(わたしのところにいらっしゃい)

(ひとつになりましょう)

赤い花は、期待に胸を膨らませます。

2、少年レモン

少年レモンは、村が好きでした。幼馴染みの少女ベリーといつも楽しく遊んでいます。ベリーは昔話が大好きで、よく湖の真ん中に咲く赤い花の話をしてくれます。

レモンは赤い花を見てみたいと思いました。花だけでなく、いろんなものを見たい。外の世界を知りたいと思います。

しかし小さな村は人手が足りません。自分勝手に行動することは許されません。

(自由が欲しい！)

渴望するレモンの心だけに、赤い花の叫び声が届きました。

気がつくと毎日、崖の上に立って、湖の島を眺めるようになります。遠くに見える花は赤く、妖しい魅力を放っています。

数日経ちます。仕事をサボるレモンが、父親に叱られます。

「ほっといてくれ！」

怒って家を飛び出したレモンの前に、心配そうなベリーが現れます。

「レモン、まさか赤い花のところへ行ってないわよね？」

「関係ないだろ！」

ベリーを振り切り、レモンは走り出します。ベリーは大人を呼びに行きます。

崖の上に立ったレモンは、大人に見つかる前に、花のところへ行こうか迷います。

しかし、昔話を思い出し、ためらいます。

「レモン～」

遠くからベリーの声がします。

レモンは村には戻らず、姿を隠します。

木の上に隠れたレモンは悩みました。

(チャンスは明日の早朝しかない)

(納屋に忍び込んでロープを持って行こう)

覚悟の決まったレモンは、深い眠りに落ちる。

日が昇る前に村に寄り、ロープを持ち出しました。

3、少女ベリー

ベリーがどんなに探しても、レモンは見つかりません。日が暮れる前、ベリーはロープとナイフを持って、赤い花のところへ行こうと決意します。

(レモンがいるなら助けたい)

(まだ来てないなら赤い花を切り倒そう)

思い詰めたベリーは、死を覚悟して、誰にも言わずに深い森を進みます。

木にロープをくくりつけ、崖の下に降りようとします。途中で手を滑らせて、尻餅をつきます。

それでもレモンを助けたい気持ちは変わりません。

湖に入って、泳いで島にたどり着きます。

赤い花に恋をしてないベリーに刺は刺さりません。茎をつかみ、ナイフで切ろうと振り上げた瞬間、固まってしまいます。

「大好きな花を切り倒したら、レモンは悲しむだろう」

ベリーがナイフを降ろします。

「わたしにはできない。他の方法を探そう」

村に戻ったベリーは、花の秘密を求めて、長老の家を訪ねます。

村の大人たちが集まっていました。

長老はいいました。

「花の魔力につかまったものは、正気を失う。自分の命より、赤い花の方が尊いと思うのだ」

レモンの父は頭を下げました。

「うちのバカ息子が申し訳ない。もう探す必要はありません。明日は仕事に戻ってください」

ベリーは最後の望みが断たれて涙を流した。

「レモンも赤い花も救う方法はないの？」

ベリーの言葉に長老が答える。

「花が愛する心を取り戻せば救われるかもしれん」

ベリーは、天に祈りを捧げた。

村人たちも祈り始めた。

4、赤い花

赤い花は、少女の怒りに震えた。茎をつかまれ、ナイフを振りかざした瞬間、死を覚悟した。

けれども少女はナイフをおろす。

(愛するものが悲しまないように、他の方法を探すだと?)

(愛.....)

忘れていた言葉に、透明だった頃の記憶がよみがえる。

(わたしにも人々の幸せを願い、訪問を楽しみにしていた頃があった)

(あれを愛というのだろうか?)

赤い花があたたかい気持ちに包まれた瞬間、強烈な空腹が襲ってきた。

(血が欲しい)

(死にたくない)

本能と思い出の狭間で、のたうちまわる。

(もう一度、愛し愛されたい)

(いや血を吸い生き延びたい!)

何度も何度も考える。

しかし答えはでない。

(あの少女が、少年を説得するかもしれない)

(そしたらわたしは空腹で死んでしまう)

(どうしたらいいの?)

赤い花は突然思い出す。かつて血を吸って殺したものたちにも、愛する人がいたことを。血を吸いまくって、孤立した罪の深さを。

(今さら悔いるな!)

(今こそ悔い改めよ!)

正反対の思いが次々浮かんで、悩み深い夜が明けた。

(どうか少年よ、来ないで)

赤い花が願った瞬間、崖の上にレモンが現れた。

(ああ)

赤い花は、ロープで崖を降りて、湖を渡る少年を、黙って見守る。

(決めなくちゃならない)

(殺すのか)

(自分が死ぬか)

(もう時間がない)

(血塗られた道を進もう)

赤い花が決意した時、レモンが島に上がってきた。

そして濡れた体で、一步ずつ近づく。

5、愛の力

レモンは、赤い花に近づき、じっくりと眺めた。

「美しい。想像以上だ」

一瞬、赤い花が震えた。

「あなたのために、命を捧げます」

レモンが花に抱きついた。

刺が肌に食い込む。痛みが全身を走る。

「さあ、ひとつになりましょう」

1分。2分。3分。

時間はどんどん過ぎていく。

不審に思ったレモンが、赤い花から離れる。

花から赤色が抜けて、どんどん透明になっていく。

「あの娘のところに帰りなさい」

花の囁きが聞こえた気がした。レモンは思わず叫ぶ。

「どうして！」

触れようとした瞬間、透明な花はガラスのように砕け散った。

レモンにかかっていた魔法がとけて、正気に戻る。

「赤い花が透明になった。その上、ベリーのことを知っていた？」

落ちている中から、一番大きな欠片を拾う。

花びらの形をした欠片は、朝日を浴びて虹色の光を反射している。

レモンは、欠片を持って村に帰ることにした。

村の入り口で、ベリーが座って眠っている。

「ベリー」

声をかけると目を覚まし、レモンに飛びつく。

「帰ってきたのね！」

話し声で起き出した村人たちが集まってくる。

レモンが長老に欠片を渡し、何があったか話した。

それを聞いたベリーも、切り倒そうとして帰ってきたことを告白した。

「お花さまは、愛の心を取り戻して亡くなられた。この欠片は村で祀って差し上げよう」
約束通り村の広場に立派な祠が建てられた。

レモンもベリーも毎日祈りを捧げました。

赤い花20240526

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
